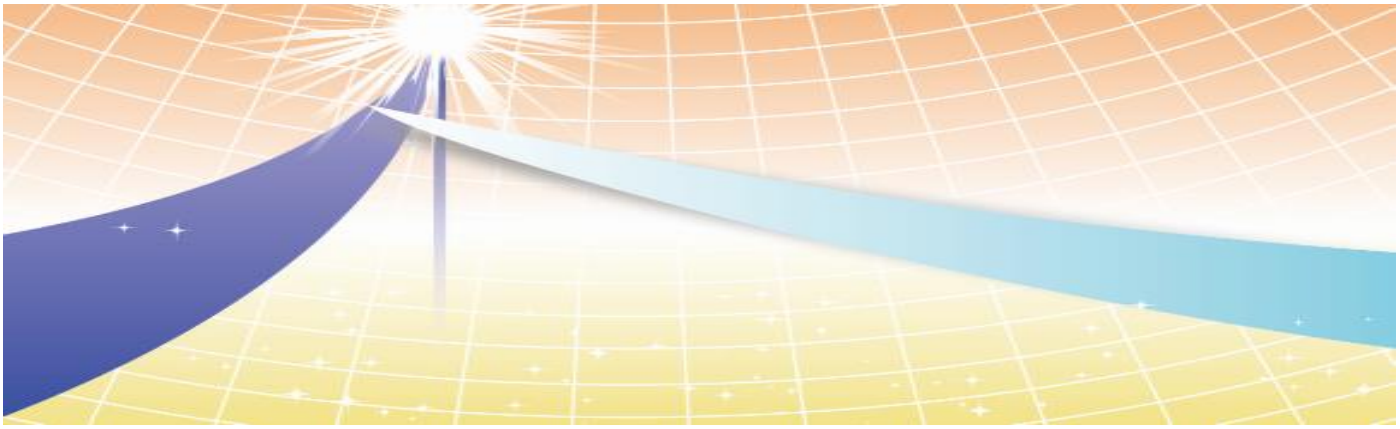

縮小社会研究会　インターネットセミナー（第一期）

「迫り来る地球危機　暮らしと社会を楽しく縮小しよう」

趣旨：生物の大量絶滅、止まらない気候変動、農薬などの人工化学物質による汚染の蔓延など地球規模の危機は人類の生存さえ危ぶまれるほど深刻な事態となっています。これらは、石油などの化石燃料の消費がもたらしたものです。その化石燃料自体の枯渇が目の先にあり、産業革命後の大量生産大量消費の現代文明の崩壊の危機に直面しています。日本のような工業先進国は、地球１個分の暮らしと社会に縮小する必要があります。物質的に無駄を省くだけでも資源の消費を縮小することは可能です。さらに、幸せな社会は何も豊富な物質だけで得られるとは限らず、人との共同、助け合い、信頼などによって安全、安心な社会を築くことも可能です。縮小社会研究会は 2008 年以来、資源の消費を減らし、幸せな社会を築く方策について議論してきました。

このたび、より多くの方に縮小社会の概念を知っていただくため、Web 会議ソフト Zoom を使用してのセミナーを開催することにしました。参加希望者は添付の登録票を提出願います。

20 時-21 時　（講演 30 分、質疑応答 30 分）

第１回　10/3　「なぜ縮小が必要か」　松久寛　（元京都大学工学部教員）

第２回　10/10　「迫り来る地球規模の人類生存危機」長谷川浩　（縮小社会研究会・福島県有機農業ネットワーク理事）

第３回　10/17　「レジリアンスを高める市民皆農とアグロエコロジー入門」長谷川浩　（縮小社会研究会・福島県有機農業ネットワーク理事）

第４回　10/24　「地球一個分の暮らしをめざして」和田喜彦　（同志社大学経済学部教員）

第５回　10/31　「科学技術は本当に人類のプラスになるのか？」尾崎雄三　（縮小社会研究会理事）

第６回　11/7　「『個人の時代』をどう生き抜くのか？」山本達也　（清泉女子大学教員）

参加費：無料

参加方法：参加申込書を松久に送付。ネットから Zoom をインストールして、自宅のパソコン、タブレット、スマートフォンなどで参加。

連絡先：松久寛（h.matsuhisa@shukusho.org）

一般社団法人 縮小社会研究会
〒606-8227　京都市左京区田中里ノ前町 21　石川ビル 305
e-mail: jimukyoku@shukusho.org　　HP: http://shukusho.org/

セミナー概要

第１回　10/3　「なぜ縮小が必要か」　松久寛（元京都大学機械工学教員）

現代文明は化石燃料、とくに石油に支えられている。しかし、その量は限りあり、産業革命後にすでに可採量の半分を消費し、残りも数十年で尽きようとしている。また、温暖化やプラスチック公害などもその原因は化石燃料を地下から地上に持ち出したことである。文明の破局を防ぐには、化石燃料の消費を縮小するしかない。金や物から共助による安全、安心な幸せな社会を作ることは可能である。

第２回　10/10　「迫り来る地球規模の人類生存危機」長谷川浩（縮小社会研究会・福島県有機農業ネットワーク理事）

この夏、北極圏では山火事が相次いでいます。ヨーロッパでは 6 月、7 月と相次いで熱波が襲いました。インドでは干ばつが続いたと思ったら、今度は洪水が起きています。温暖化どころかこれまでの安定した気候は崩壊の危機に瀕しています。人類は自ら合成した 10 万種類もの化学物質を環境に撒き散らして、我々の体は微量ながらも多くの人工化学物質に暴露されています。生物の絶滅も史上空前のスピードで進んでいます。地球規模で人類生存の危機が起きようとしています。それを引き起こしているのは我々、人類自身なのです。原因は突き詰めれば、我々が地球を使いすぎている（Overuse）からです。世界平均だと 1.7 個、日本人と同じベルだと 2.8 個もの地球を必要とするほど地球に負担をかけているのです。1970 年代から、経済成長を続けることには限りがあることは指摘されていましたが、ずっと先送りしてきました。もう残された時間が限られています。

第３回　10/17　「レジリアンスを高める市民皆農とアグロエコロジー入門」長谷川浩（縮小社会研究会・福島県有機農業ネットワーク理事）

これから起こる気候危機に少しでも備えるには、食料生産と水の再利用に市民一人一人が、できる範囲で関わることが欠かせません。農薬や化学肥料に依存することなく、高温多湿の温帯モンスーンである日本において有機農法を行うための、原理原則を紹介します。水の再利用や生ごみの資源化についてもお話しします。また、東京などの大都市一極集中を避けて国土全般に満遍なく住むことも必要です。

第４回　10/24　「地球一個分の暮らしをめざして」和田喜彦（同志社大学経済学部教員）

私たちの暮らし（ライフ・スタイル）が地球生態系に過度な負荷を掛けていることを感覚的に理解できたとしても、ライフ・スタイルの変更（ひいては経済構造のパラダイムシフト）に結びつくとは限らない。しかし、地球生態系への負荷を数値で知ることができれば、自らの暮らしのあり方を変えたいという動機を持つことができることは実証されている。地球環境への負荷を数値で示すことを可能にするツールのひとつとして注目されているのがエコロジカル・フットプリントである。エコロジカル・フットプリントは私たちの暮らしが地球の生物生産力（バイオキャパシティ）の何倍の負荷を掛けているのかを示す指標である。その倍率を 1.0 倍以下に下げることができれば暮らしは持続可能なレベルであると示唆される。この回では、エコロジカル・フットプリントの概念と応用事例を紹介したい。

第５回　10/31　「科学技術は本当に人類のプラスになるのか？」尾崎雄三（縮小社会研究会理事）

人類が科学技術の進歩によって大きな恩恵を受けていることは否定できない。しかし，コインに表裏があるように，科学技術にも裏の面，負の側面があり，表面だけをとることはできない。オクスフォード大の研究で報告されている現代文明崩壊の 12 のリスクのうち 8 項目が科学技術によるものである。さらに資源の枯渇など重要なリスクがあり，科学技術の進歩が文明の崩壊を招く事態は否定できない。いたずらに危機を煽ってはいけないが，リスクを正面から受け止め，資源の消費，環境への悪影響などの側面をもつ科学技術への過剰な依存のない社会，すなわち縮小社会への移行が必要である。今回では科学技術のリスクの全体像を紹介する。

第６回　11/7　「『個人の時代』をどう生き抜くのか？」山本達也（清泉女子大学教員）

縮小社会に突入するということは、これまでの「拡大」をベースとした社会とは、根本的に異なる社会に生きるということを意味する。この回では、まず、縮小社会における「社会デザイン」を考える際の見取り図について示す。その上で、個人のあり方、とりわけ「マインドセット」と「求められる能力」について検討する。今の時代は、良くも悪くも「個人の時代」としての特徴を出しやすい。よい意味というのは、人類史上今ほど個人が個人として活躍できる環境が整っていた時代はないという意味であり、悪い意味というのは、最終的には個々人しか頼る術がないかもしれないという意味である。この回では、これらの背景をふまえつつ、縮小社会における個人の役割と、今後の展望について考えてみたい。